

# 阿嘉島臨海研究所の 2015 年 (平成 27 年)

保坂 三郎\*  
熱帯海洋生態研究振興財団理事長  
岩尾 研二  
阿嘉島臨海研究所

The year of 2015 at AMSL

S. Hosaka\* · K. Iwao  
\* E-mail: saburo@amsl.or.jp

## ●日本サンゴ礁学会功労賞を受賞して

保坂三郎(熱帯海洋生態研究振興財団理事長)

2015 年から日本サンゴ礁学会功労賞が新設され、その第一番目の受賞者としてお選びいただきましたので、学会員皆様のお気持ちを素直にお受けいたしました。

1997 年に日本サンゴ礁学会が設立される 9 年ほど前の 1988 年の夏に、財団法人熱帯海洋生態研究振興財団(現在は一般財団法人)の現地研究部門「阿嘉島臨海研究所」を設立して、かれこれおよそ 4 半世紀、研究所のある沖縄県慶良間の海とさんご礁をとりまく環境もずいぶん様変わりしてきました。サンゴの生態すらもよく解らなかった当時を思い出し、毎日のように潜っていた海を懐かしく思います。設立当初は、オーストラリアのジェームススクック大学から専門家を招き日本人研究員への指導・協力を得るとともに、パラオにあった日本のさんご礁研究所で活躍された元田茂先生の研究手法を基礎に手探り状態で研究所の体制を整え、什器備品から始まり、海水や電気(台風時の停電対策)、小回りの利く小型舟艇などの整備、さらに長期滞在が可能になるように専従のシェフの付いた衣食住の充実に向けて頑張りました。

今では、小さな阿嘉島の人口もおおよそ 300 人程度となり、隣りの座間味島とともに観光客が増え、大変に賑わっています。美しいさんご礁のおかげで 2014 年に国立公園に指定されたことも大きな要因と思いますが、私たちの研究所はコツコツと小さなことから研究に励み、地域の子供たちへのさんご礁教室やダイビング協会への指導など、常日頃から地元の自然環境の保全に貢献するために尽力してきました。

これからは、次世代を担う、元気な研究者が、小さな阿嘉島臨海研究所を足掛かりにして活躍してくれることを期待しております。私自身も現役のダイバーとして、きれいな海にいつまでも係っていきたくております。研究室での分析や実験なども大切ですが、さんご礁の現場をサンプリング場所としてだけでなく、研究そのものの場として重視してくれる研究者に声をかけてもらいたいと願ってやみません。

## ●阿嘉島臨海研究所の 2015 年

前項のとおり、保坂三郎理事長が日本サンゴ礁学会の功労賞を受賞しました。研究所の長年の活動が認められた証でしょう。ようやく慶良間のさんご礁もオニヒトデのダメージから回復し始め、場所によっては直径 40cm ほどのテーブル状ミドリイシが多数密生する光景も見られるようになってきました。もう一度 10 数年前

のひしめくようにサンゴ群体が生息する慶良間の海にもどって欲しいと思います。2016 年には高水温も予想され白化が心配ですが、激増した観光客によるストレスもまた不安材料です。適正な利用を考えなければなりません。私たちも、これまでも増して、海域の保全についての取り組みに力を注ぎたいと思いますので、さらなるご支援をよろしく願います。

---

2015年(平成27年)阿嘉島臨海研究所の1年間の動き  
List of research activities at AMSL by visitors and staff members in 2015

●主な利用者と研究課題など(敬称略)

- 1月 「ミドリイシ属の繁殖生態に関する研究」 守田昌哉(琉球大学熱帯生物圏研究センター)ほか:9月まで毎月実施
- 5月 「ミドリイシ属サンゴの雑種に関する研究/クサビライシ類の分類学的研究」 深見裕伸(宮崎大学農学部海洋生物環境学科)ほか:6月まで実施
- 9月 「サンゴ群体間距離と受精率に関する研究」 河野時廣(東海大学生物学部)ほか
- 11月 11月26日~29日に慶應義塾大学三田キャンパス(東京)で開催された日本サンゴ礁学会第18回大会において保坂三郎理事長が学会功労賞を受賞した。また、テーマセッション「サンゴの種苗生産と植え付け」において岩尾研究主任が「サンゴ群体間距離と受精率についての研究」の紹介をおこなった。

●その他の主な来所者(来所日順)

茅根 創(東京大学)ほか、神谷大二郎(沖縄県庁環境部自然保護・緑化推進課)、鹿田正一(水産土木建設技術センター)、御蔵島観光協会一行、近畿大学文化会潜水部一行、花田 攻(日本財団)、岸 秀蔵(環境省慶良間自然保護官事務所)、諏訪僚太(海洋生物環境研究所)ほか、櫻又涼子(環境省那覇自然環境事務所)ほか、宮園康司(沖縄県産業振興公社)、柳谷牧子(環境省自然環境局)ほか、国立沖縄青少年交流の家職員一行、木田岳美(丸紅)、藺 巳晴(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)ほか、石川厚志(乃村工芸社)ほか、西村 学(環境省那覇自然環境事務所)ほか、立田 穰(電力中央研究所)、和田直久(日本大学)ほか、上原拓郎(立命館大学)ほか、八代幸太郎(東京久栄)ほか、沖縄水産高等学校海洋生物系生徒一行、梅澤一夫(愛知医科大学)ほか、日本シニアダイバーズクラブ一行

●AMSL 刊行物

「みどりいし」 No. 26

「アムスルだより」 No. 131-136

●発表論文等

岩尾研二(2015) パラオ熱帯生物研究所と阿嘉島臨海研究所、そしてパラオ国際サンゴ礁センター. 海外漁業協力(72): 2-6

Kuniya N, Jimbo M, Tanimoto F, Yamashita H, Koike K, Harii S, Nakano Y, Iwao K, Yasumoto K, Watabe S (2015) Possible involvement of Tachylectin-2-like lectin from *Acropora tenuis* in the process of *Symbiodinium* acquisition. Fisheries science 81(3): 473-483. DOI 10.1007/s12562-015-0862-y

大森 信・車 淑禎・磯川晴章(2015) 阿嘉島のさんご礁域に出現する浮遊性カイアシ類の種組成、個体数密度および季節変動. 日本プランクトン学会報. 62(2): 98-109